

河上肇の経済思想と『貧乏物語』

― 生活の質』と貧乏

八木紀一郎

1. はじめに

私は7年前に京都大学を退職いたしました。現在は大阪寝屋川市にありますが摂南大学に勤めております。

河上肇記念会では2013年秋の法然院での総会でお話しさせていただきました。そのときは、20世紀のマルクス学の苦難と河上肇」というテーマで、戦前の国際的なマルクス学の研究をとりあげました。おそらく、その前に河上肇と福田徳三を並べてとりあげたNHKの『eテレ』日本人は何を考えてきたのか』第8回 大間復興の経済学をめざして』〜河上肇と福田徳三 2013年1月7日放映の企画があり、特に関東大震災の対

応に福田徳三が取り組んだということもあって、eテレの企画になったのだと思いますが、私がそれに出て発言いたしましたので、ご指名を受けたのだと思います。その時は、1920〜30年代の世界全体でのマルクス主義・マルクス学の動向についてお話ししましたが、河上の思想そのものについてはお話しませんでしたので、期待を逸らしたことになるかもしれないと思っていました。

今度お誘いがあってお引き受けしたのは、自分には謎がのこっていた『貧乏物語』を理解する鍵が見つかった― 生活の質』ということから考えると河上の思想が分かりやすくなると思ったからです。

生活の質』 QOL (Quality of Life) というのは、現代の福祉関係者、医療保健関係者にはよく知られている言葉だと思います。これは現代

の思想家であるマーサ・ヌスバウム フェミニスト) や経済学者にして倫理学者のアマルティア・センといった人たちによって 広い意味でとらえられて、医療や福祉を含む全体の概念として論じられております。

河上が好きだったラスキンの言葉に、*There is no wealth, but life.* という言葉があります。

河上はこの句を『**寶乏物語**』の序で引用して、
富何者ぞ、ただ生活あるのみ」と訳し、その意を彼流に 富なるものは人生の目的―道を聞くという人生唯一の目的、ただその目的を達するための手段としてのみ意義あるにすぎない」と解しています 岩波文庫版5ページ)。これは私はいかにも 河上の「だ」と思います。

しかし、ラスキンはその後、*Life, including all its power of love, of joy, and of admiration.* 愛し、喜び、また讃嘆するすべての

きる生活)と続いています (John Ruskin, *Unto This Last*, 1860, *Ad Valorem*, Section 77)。これはまさに 生活の質」(QOL)です。アマルティア・センが言っている *capability* (能力、選択可能性) を持つことに通じるものがラスキンの言葉であり、河上はそのことを知っています。河上は、それを 道を聞く」という求道者的な視点から表現しています。ここにはイギリスと日本の思想の構図のズレのようなものがありますが、それを含めて、『**寶乏物語**』が全体として 生活の質＝QOL」を問いかけた著作であったことというのが私の結論でございます。

ここで、『**寶乏物語**』と 生活の質」の関連という本論に入る前に、『**寶乏物語**』の著者による絶版の理由についての推測からはじめることをご容赦ください。

2. 『貧乏物語』の絶版・何が放棄されたのか

ご存知のように『貧乏物語』は謎めいている著作です。最初に、大正5年（1916年）の9月から12月にわたって『大阪朝日新聞』に断続的に掲載され、翌1917年3月に1冊の書として刊行されました。40万部ちかく売れたとのことですが、堺利彦や櫛田民蔵らの批判を受け、2年後には絶版にしまいました。しかし、それを完全に読めなくしたというわけではありません。その上・中・下の三篇構成のうちの上篇と中篇を1920年の『改版社会問題管見』に 前篇 貧乏物語断片」として収録しています。上篇というのは『かに多数の人が貧乏しているか』で、中篇は『ゆえに多数の人が貧乏しているか』、そして下篇は『かにして貧乏を根治しうべきか』です。つまり、1920年の河上が人目にさらしたくないと思ったのは、『貧乏物語』のうち、貧乏撲滅の

政策を論じた下篇だけでした。

したがって、多くの人が、廃棄された下篇で出されていた政策的な立場、つまり、金持ちたちが自発的に贅沢を止めることで貧乏を無くすことができる」という結論を維持できなくなったのが『貧乏物語』絶版の理由であると考えたのも無理はありません。

それに対して、河上は『貧乏物語』執筆時から、戦争経済のもとでの生産の社会化をみてとって、社会主義の可能性を考えていたのであるから、贅沢廃止論を結論としたのを河上の真意とするべきではない」と論じられたのが、本記念会の代表もされていた杉原四郎先生でした。（『貧乏物語』の想源」杉原1996年第4章）

どちらももつともですが、政策論ばかりに囚われていて、河上独自の『貧乏』論を見落としているのではないかというのが今頃になっての私の

感想です。

みなさんは 金持ちが贅沢を止めることがなぜ貧乏の解決策になるのか」といふかられるかもしれない。しかし、『贅乏物語』執筆時の河上には、英国のエコノミストであるワイザーズ (Harley Withers) 類いの「貧乏原因論」があったと思われるから、この政策も、あながち荒唐無稽というわけではありません。つまり、生産資源の多くの部分が贅沢品に向かい、大衆の必需品の生産に向かう部分が少なくなるとすれば、大衆の必需品は欠乏し、入手できても高価になって大衆の生活難を引き起こすというものです。この考えを記した『贅乏物語』七の二の文章は、改版社会問題管見」にもそのまま残っています 118 ページ) から、河上は 1920 年の時点でも、貧乏の原因論としてそれを維持していたと考えられます。したがって、それから出てくる結論もすぐには否定できない

と思います。

ここで 1 点注意して欲しいのは、金持ちが贅沢品に金をつぎ込むと大衆の必需品が圧迫されるのは、カネであらわされる需要にしたがって生産が行われるのが、今日の生産組織」だからだとも言っていることです。ですから、カネではなく大衆のニーズにしたがった生産の社会化、いいかえれば社会主義の実現というのも、河上の貧乏原因論から引き出されるもう一つの政策になりうるということです。

みなさまを混乱させて申し訳ありません。私の言いたいことは、『贅乏物語』から 改版 社会問題管見」まで維持された河上の貧乏原因論からすれば、金持ちの贅沢廃止」論と 生産の社会化」論のどちらも貧乏根治策になりうるということで、『贅乏物語』絶版の理由は、この二つの解決策の二者択一的な対立には無かったということ

す。

それでは、『改版社会問題管見』で本当に消し去られたものは何でしょうか。それは『貧乏物語』にあった、いま一つの解決策である「貧富格差の是正」「所得分配」の社会政策です。

『改版社会問題管見』の『貧乏物語断片』は、下篇の冒頭 穴の二と 穴の二で終わっています。しかし、ここでは、貧乏の原因としての格差およびその是正策についての言及は断りなしに、きれいに取り去られています。

断片』では 穴の二の該当箇所は以下のようになっています。

(一) 現時の経済組織にして維持せらるる限り、
(二) 或いは又、富者がその余裕あるに任せて、妄りに各種の奢侈贅沢品を購買し需要する限り、貧乏を根絶することは、到底望みがたい。

しかし、もともとの『貧乏物語』では、貧乏原

因論は三条件で、その (一) また社会にはなはだしき貧富の懸隔を存する限り」 岩波文庫版 89 ページ) が抜けて、3 つが 2 つになっています。

また政策についても、

第一に、世の富者が若し自ら進んで一切の奢侈贅沢を廃止するに至るならば、貧乏存在の二条件の中その一を欠くに至るべきが故に、其は確かに貧乏退治の二策である。第二に、今日の如く各種の生産事業を私人の金儲仕事に一任し置くことなく、例えば軍備又は教育の如く、国家自ら之を担当するに至るならば、現時の経済組織は是が為め著しく改造せらるる譯であるが、これも亦貧乏存在の二条件を無くする所以であって、貧乏退治の二策として、おのづから人の考え至るところである。 (『改版』130 - 131 ページ)

これについてももともとあった 第二が抜けています。

第二に、なんらかの方法をもって貧富の懸隔のはなはだしきを匡正し、社会一般人の所得をして著しき等差なからしむることを得るならば、これまた貧乏存在の一条件を絶つゆえんなるがゆえに、それも貧乏退治の一策となしうる。同90ページ)

このことは何を意味するのでしょうか。それは、生産政策に分配政策を対置するとか、所得再分配によって格差を是正するというような匡正的な社会政策を、河上が弥縫的な政策として拒否したということです。利己心によって経済活動が営まれる資本主義のもとでは、いくら貧民救恤策をとっても、所得再分配政策をとっても、既にある貧困に対策をとる端から新しい貧困が生じてしまう。『貧乏物語』の絶版という決定は、河上が、貧困問題の究極的な解決」は、生産組織の全体を変革し、人々のところを変える「組織改造」と「大心改造」の二重の改造」(革命)しかないという、

いわば「改造主義」「革命主義」というべき立場に移行したということの意味していると思います。

このような社会政策から「改造主義」あるいは「革命主義」への移行は、おそらくロシア革命の影響と思われるが、河上の特徴はこの段階でも「組織改造」「社会革命」と「大心改造」「精神革命」を結びつけていたことです。この組織・人心改造、あるいは社会・精神革命両輪論が、マルクス主義の唯物史観を受け入れた櫛田民蔵や福本和夫に批判され、河上は、意識は社会関係によって決定されるというマルクス主義を科学として受け入れざるをえなくなります。これが、1920年代半ばの第二段階における河上の思想的移行です。

しかし、彼は科学的真理と次元を異にした「宗教的真理」として、「この革命」を胸中深くも

ち続けました。近代日本の精神史において、このような組織・人心改造論、あるいは社会・精神革命論の登場は、現在にいたるまでその影響を残している現象です。それが、河上を近代日本の精神史の象徴的な存在にしている理由です。

3. 『貧乏物語』上篇の貧乏論

さて、これまでとりあげてきたのは、『貧乏物語』の中篇と下篇、つまり貧乏問題の原因と解決策についてでした。この二つの篇での河上の主張は大きな問題をはらんでいて、彼自身、1920年前後と1920年代半ばの2段階にわたって放棄ないし後退せざるを得なかった主張でした。それでは、問題にならなかった上篇 いかにも多数の人が貧乏しているか」では、どのようなことが書かれていたのでしょうか。私が注目したセンテンスは、伍賀先生、小久保先生も配布資料に書き抜き

されています。我が意を得たり」という気持ちでございます。

驚くべきは現時の文明国における多数人の貧乏である」と説き始めるこの上篇で、河上はまだ貧乏人を定義する仕方が3つあると言います。

第一の意味は、金持ちに対する貧乏人、つまり格差あるいは比較によって定義される貧乏人です。しかし、河上は自分が問題にするのはこの意味での貧乏人ではない、と言います。

第二の意味の貧乏人は、慈善や公的扶助によって生活を維持している貧民、被救恤者ですが、これも河上が問題とするものではありません。

最後に河上が問題にしたい第三の意味の貧乏人が来ます。肉体 ボディと知能 マインドと靈魂 スピリット)、これら3つのものの自然的発達をば維持して行くがため、言い換うれば人々の天分に応じてこれら3つのものをばのびると

ころまでのびさして行くがため、必要なだけの物資を得ておらぬものがあれば、それらの者はすべてこれを貧乏人と称すべきである。」(同14ページ)人間の天性の発達を物資の欠乏によって妨げられている者というのが、河上が問題にしたい貧乏人です。この第三の意味を与えたあとで、マインドやスピリットは客観的に測りにくいので、便宜的に、肉体 ボディ の 自然的発達」の維持のために必要な物資を得ているかどうかを基準とせざるをえないとして、貧乏線」(poverty line)の説明に入ります。

この上篇では、英国の貧困研究者にならって、貧困線」は1日あたり摂取カロリー何カロリーになるとか、貧乏線」以下、あるいはその真上にいるのは人口の何パーセントになる、といった議論が続きます。それで、河上が 第三の意味」に託した思い 発達の阻害」という視点がとらえに

くくなっているかもしれません。第一の意味 経済上の不平等」でも、第二の意味 経済上の依願」でもなく、生活の享受の阻害という第三の意味の貧乏を河上は 経済学」が問題にすべき 経済上の欠乏」であると言っているのです。最近 は 清貧の思想」というようなタイトルの本を書いた人もいますが、『貧乏物語』の貧乏とは、全く異なります。

繰り返して言うが、私のこの物語に貧乏というのは、身心の健全なる発達を維持するに必要な物資すら得たわぬことなのだから、少なくとも私の言うごとき意味での貧乏なるものは、その觀念自身からして、必ずわれわれの身心の健全なる発達を妨ぐべきもので、それが利益となるはずはありえないのである。」(同42ページ)

河上は、世の中に様々な社会問題が起きている

のは、多数の人が貧乏しているからだという英国の論者に賛同します。貧困は社会問題を生み出します。とくに、生活上の欠乏が児童をむしばむとき、子供たちは肉体の発達とともに精神の発達も阻害されます。河上は英国ブラッドフォード市がおこなった貧民児童に対する給食事業に一つの社会実験として着目しました。この給食事業は、対象児童の体重を増加させただけでなく、その顔色が輝いて来て、その態度は快活になり、学業もこれに応じて進歩を示した」。同54ページ）この社会実験は、児童の貧困への対策に、肉体のみならず精神の発育阻害を除去する効果があることを示したのです。

河上は『貧乏物語』の序に次のように書きつけていました。

大はパンのみにて生くものにあらず、されどまたパンなくして人は生くるものにあらずという

が、この物語の全体を貫く著者の精神の一である。思うに経済問題が真に人生問題の一部となり、また経済学が真に学ぶに足るの学問となるも、全くこれがためであらう。」同4ページ）

河上の言う「第三の意味」での貧乏を紹介しましたが、それが「生活の質」QOLにかかわるものであることをお掴みいただけたと思います。河上の言葉でいえば、「肉体」「精神」「靈魂」を発達させることです。河上は、その目的は「大の道を聞く」ためであると表現しましたが、ラスキンの表現で言えば、「Life, including all its powers of love, of joy, and of admiration. 愛し、喜び、讃嘆する能力を備えた生」です。これは、現代の経済学が言うような「効用」であらわされるような「快楽の満足度」というような「状態」ではありません。それは「アマルティア・センのことばで言えば、潜在能力」(capability)。

人間の様々な機能を行い得る自由を備えた「生活」のあり方です。ラスキンの言葉で言えば「愛し、喜び、讃嘆する能力」です。河上の言葉で言えば、「道を聞く」能力でしょう。このように河上が「貧乏」からの解放を、「富」ではなく「道を聞く」能力にあると考えていたことを知るならば、彼が最後まで、マルクス主義者になった後でも、胸中深く「モラル・レヴオリューション」の思想を持ち続けていたことについても合点がいくことでしょう。

本日のお話しのしめくくりとして、私自身が河上肇の『貧乏物語』にかかわって衝撃を受けたことがあります。1970年6月30日のことで、東京地裁の法廷に立った永山則夫が、突然『貧乏物語』の末尾に河上が置いたウィリアム・ボンガーの英文を暗唱したことです。永山則夫は1968

年の10月に米軍横須賀基地に侵入して盗み出したピストルによって、翌月にかけて東京、京都、函館、名古屋で4人を射殺した事件の犯人です。

Poverty kills the social sentiments in man,
destroys in fact all relations between men.
He who is abandoned by all can no longer
have any feeling for those who have left
him to his fate. - Bonger, Criminality and
Economic Conditions, 1916, p. 436

河上訳：貧乏は人の社会的感情を殺し、人々との間におけるいっさいの関係を破壊し去る。すべての人々によりて捨てられた人は、かかる境遇に彼を置き去りにせし人々に対しもはやなんらの感情もち得ぬものである。ー ボンガー『犯罪と経済状態』同172ページ)

ボンガーという人はオランダの社会主義者で1905年にアムステルダムで出版した

Criminalité et conditions économique, G. P. Thierie が、1916年に英訳出版されています。

『貧乏物語』の執筆時に、出たばかりのこの英訳書からこのような適切な文章を見つけ出した河上も慧眼であったと思います。460頁もある本ですがインターネットで読めます。犯罪の統計と所得の状況とか貧困の状況とかの関連をまとめた章の中にこの文章があります。言うまでもありませんが、ボンガーが貧困の作用としているのは、ラスキンの「生」の逆です。センは、貧困を動機の面で捉えるならば「基本的潜在能力」の欠如になると言いますが、それにも合致します。

永山則夫は弁護士が差し入れた『貧乏物語』にこの章句を見つけて、自分の犯罪が「貧困」によって「社会的感情」を失わされた結果であることを知りました。彼はこの文章を辞書を引いてノートに書き留め、毎朝起床時にこの英文を暗誦して

いました。『無知の涙』増補新版、河出文庫、1990年、410ページ）

この文章は永山則夫にとつては天啓のようなものだったろうと思います。法廷でのパフォーマンスはそのあとです。『貧乏物語』は彼に自分を知らしめました。しかし、その27年後の1997年8月1日、日本という国は、貧困に起因した「無知」を悟ったこの青年を死刑に処しました。

この青年の心を動かしたのは、河上肇の『貧乏物語』でした、私は永山則夫と同世代でしたと言付け加えて、私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【参照】

河上肇『貧乏物語』弘文堂、1917年、寸大内兵衛解題『貧乏物語』岩波文庫、1947年。河上肇全集』第9巻、岩波書店、1982年）

河上肇 『改版社会問題管見』 弘文堂、1920年

（これは国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能）。

子安宣邦のブログ 河上肇は『貧乏物語』をどう廃棄したのか」 2015年6月10日）

http://blog.livedoor.jp/nobukuni_koyasu/archives/34264983.html

アマルティア・セン著、鈴木興太郎訳 『福祉の経済学―財と潜在能力―』 岩波書店、1988年。

マーサ・ヌスバウム／アマルティア・セン編著、

竹友康彦監修、水谷めぐみ訳 『オリティー・オブ・ライフ―豊かさの本質とは―』 里文出版、2

006年。

杉原四郎 『原人河上肇』 岩波書店、1996年。

武田和夫 『死者はまた闘う―永山則夫裁判の真相と死刑制度―』 明石書店、2007年。

永山則夫 『無知の涙』 増補新版、河出文庫、19

90年。

ブログ 『それでも永山則夫が好きだ』 2016年5月27日 永山が諳んじたウィリアム・ボンガー」

http://blog.goo.ne.jp/nagayama_norio/e/e49737b7b861de5b4a0ca38560be260d

山之内靖 『改版社会問題管見』序文『経済論叢』第124巻第5・6号 1979年11・12月）

ラスキン著、飯塚一郎訳 「の最後の者にも」、五島茂編 『ラスキン・モリス』世界の名著41（中央公論社1971年

William Adrian Bonger, Criminality and Economic Conditions, Boston, 1916

（https://archive.org/details/criminalityand_e00hortgoog）